

## 《企画書》

提出者 ペンネーム 朝倉敦美(本名 丸川敦美)

### 【タイトル】 ママ アイラブユー

#### 【概要】

形式は、自伝的小説です。扱う内容は、母と子のあり方です。人の絆の原形は、母と子のかかわりにあると考えます。人が、社会で人とつながれなかったり、仕事でうまくいかなかったり、学校の成績が伸びなかったりという問題の背後に、母と子の関係性が共依存関係だったり支配関係である場合が、かなりあると考えています。母親が常日頃から、子供の行動や、日々の宿題に至るまでジャッジするわけですね。塾講師として、そうゆうお母さんは20年前と比べてずいぶん増えたなあ実感しています。必ず今後、ますます深刻な問題になっていくものと思われまます。ところが、解決するのが難しい。アドバイスだけでなんとかなる問題ではないことを痛感しました。そこで、許しと癒しのストーリーを考えました。

ストーリーが有効だと思ったのは、アドバイスよりも感情移入しやすく、大きく感情が揺り動かされることと。そして、毒親から逃げる、というシンプルな解決方法もあるので、書いてあることにこだわらない柔軟性を持たせるためにも有効だと思いました。

#### 【想定する読者ターゲット】

- ① 仕事や人間関係に悩む人
- ② 子育てに悩むお母さん
- ③ 毒親を許せないで苦しんでいる人
- ④ 自分に自信が持てない人

#### 【構成案】

主人公の「私」はかつての母と子の、共依存関係、支配関係の「被害者」で「重病人」でした。その過去を反省材用にしたおかげで、子供との関係はうまくいっています。自分の母親のことをかつては毒親だと思っていましたが、今はもはや恨んでいません。自分では、「病気」も完治したし完治もしたし、60歳を目前にし、自分は人生においてやるべきことはほぼやり終えたと思っています。

しかし、これから老後の人生を前にして、子供へのサポートと経済のやりくりだけを中心とした老後を送ることのみを考えていることに疑問を抱きます。

そして、夫との間にお金のことで問題が起き続けていることで、もしかしたら、これは、自分が引き寄せている問題なのではないかと考えます。

また彼女は、母親が倒れて寝たきりになったこと、そして、自分が出版を目指して本を書き始めたことで、様々な後悔や恐れがわきあがってくることを経験し、一から過去に向き合い、たくさん残っていた痛みを一つ一つ癒していく作業を心の中で開始します。

そして、自身への信頼と、未来への希望を取り戻していきます。

最後は、「私」の心の叫び、母親への愛の言葉でストーリーは終わります。

## 【サンプル原稿】

母と子の間には、美しい愛もあるけれど根深い問題が隠れていることもある。そのことについて本を書いてみるはどうか。

そんな妄想のような願望を持つようになったのは、今年の六月あたりだったと思う。そのころ頭の中にあったアイデアは、今私が書いているものとは違っていた。主に私と私自身の子供との間のエピソードで、例えばこんな感じだった。

自分の人生が今くいていないと感じている場合、それは誰かほかの人のせいだと考えがちだ。それを結局は自己責任って言われると、え？って言いたくもなる。でも、外の誰かが自分の人生の責任をとれるだろうかと問いかけてみると見えてくるものがある。

例えばこんな風に考えてみると分かりやすいかもしれない。子供に代わって受験するとか、子供に代わって彼氏や彼女を作るだとか。そんなことは不可能だと思うと、納得できそう。

もしこんな話を持ち出しても受け入れられないのだとしたら、相手を自分の思い通りにコントロールしようとしている可能性がある。子供に自分の人生に対して責任を持つ権限を与えないのは、相手に独立した人格があることを認めないことだ。そこから母と子の対立関係または依存関係が始まる。依存関係はマイルドな対立関係に他ならない。相手の自由な考えや行動を制限しているという点では同じだろう。そう考えると個人の対立も、もっと大きな規模の対立も、相手をコントロールしようとするところからくるのかもしれない。

私は、自分の子育ては、まあまあうまくいったと思っている。それは世間一般で言われているような成功例、例えば、有名で就職にも強い難関大学に合格させた、とかいうようなことでもなければ、だれもがうらやむような大企業に就職させた、ということでもない。

私にとっての子育ての成功とは、子供たちが失敗したとしてもそこから学び、自分のペースで成長し、少しずつ自信を蓄えていくこと。友人関係に恵まれること。そして親子の間でコミュニケーションが取れ続けること。子供の今現在の姿を祝福してやれることだ。

そのために私が大切にしてきたのは、どんな言葉がけをしてやるかということと、どんな態度で話を聴いてやるか、だった。子供が話を始めたら、手を止めて、しっかりと顔を見て、頷きながら自分の意見をさしはさまず、話が終わるまで待ってやった。あとは、子供たちとたくさん楽しい時間を持つこと。もちろん、私は世間では絶滅危惧種と言われるところの、専業主婦だったので、時間がたっぷりあったからできたのだといわれれば、そうかもしれない。しかも、専業主婦としても母としても、決して優秀ではなかった。二つのことを同時にやるのが無理で、いろんなことをこなす能力に全く欠けていたので、専業主婦でいさせてもらえたのはありがたかった。そういう意味では、私以外の主婦の方のほうがずっと優秀なのですよ。

ともあれ、能力に欠ける私にできるのは、やることをできるだけ絞ってそれに集中することだ。誰にでも、得意パターンはあるはず。

子どもたちと楽しい時間をたくさん持ったのは、私の母の影響だ。母は楽しいことが大好きだった。今でも子供の時楽しかったことを数え上げるときりがない。ところが、こと、言葉がけに関しては、母は全くの反面教師だった。私はどれだけ、母の私を非難する

言葉や否定する言葉で自信を失ってきたことか。本当に素晴らしい母親でありかつひどい母親だったと思う。今では幸せに暮らしているので、母を非難する言葉はなるべく言いたくないのだが、説明するために言わざるを得ないのは心苦しい。母に心の中で謝りながら書いている。

言葉がけを意識してよいものにするのは苦勞した。最初は、言うてはいけないと分かっているけども母と同じような言葉が出てしまう。何でできないんだとか、あきれたような物言いかそれか子供に対してどうしても出てしまう。大したことでもないのに怒鳴ってしまう。長年実際に見て体験したことなので、やめたいと思ってもなかなか取れない。

幼い子供たちというのは、一度や二度母親に怒鳴られたくらいでは、お母さんを嫌いになったりはしない。お母さん大好きでいてくれる。こんなかわいい子供たちに対して自分は何をやっているんだと、自分の心を殴りつけたくなったことも一度や二度ではなかった。

言葉がけなんかで子育てなんかうまくいかないという人もいるだろう。うまくいかないのならやめればいいのにといい人もいるだろう。でも、私は、母の言葉がけが私にどんな影響を与えていたのか骨身にしみていた。聞き流せばいいだろうという人は、今では毒親と呼ばれるような母親の行動パターンを正しく理解していない。重い通りにならなかつたら、癩癩を起こし、どなる、わめく、暴れる、の三拍子だと知らないからそんなことが言える。そんな母親に限って外に出れば、しっかりした奥さんとの評判も高かつたりするのだ。そして、お母さんに比べて、しっかりしていないなどというありがたくない評価を世間様から頂戴するなんてこともある。子供の時の私は天国と地獄の両方に住んでいるようなものだった。私が、何としても子供への言葉がけをうまくなりたいと思った理由がお分かりいただけたらどうか。

不器用な私は、昔から、一点集中でなければ結果を出せない。それで、世間でもいろんなよい言葉が紹介されているけれど、それをできる限り絞り込んだ。

だいすき、かわいいね、頑張ってるね、偉いね、すごいね。たったこれだけの事でも、最初は、歯が浮くと思ったし、あつ、さっきせつかくいうチャンスだったのに。とそんなことばかりだった。なので、何の脈絡もなく、言うことだけに集中した。テニスの試合に出る前に素振りをいっぱいするようなものだ。何年も何年もやってきて、今では、ちゃんと会話の流れの中で使えるようになっているから不思議だ。

思うに日本人は、愛情を語るのに、言葉以外のものに頼りすぎるのではないだろうか。子供への笑顔、おいしい手料理、かわいい服、に始まって、はては、世間の荒波から守ってやりたいとか。

子供だってわかっている。だからこそ、大好きな母親の口から出る鋭い言葉や非難のまなざしが、心を刺すようにつらくても黙ってその痛みを耐えようとする。受け入れようとする。そして、自分はダメな人間で、世間はつらくて厳しいというメッセージを受け取るのだ。

もしも、子供が母親から受けとった言葉のせいで、「病気」になるのだとしたら、私はかなりの「重症患者」だったという自覚がある。私は、自分の子供を「重症患者」にせず済んで本当に良かったと思っている。

もう一つ、私が最近気に入っている言葉がある。これは、二年前に大学に合格し進学先

が決まった息子とのやりとりで生まれた言葉だ。

息子の、大学受験勉強は、志望校合格で幕を閉じた。その時に、息子が言った。もう少し早く受験勉強を始めていれば〇〇大学に合格できたかもしれないのに。

息子は頭がいいのに、全く家で勉強しない子だった。受験勉強を始めたのは三年生の五月からだ。なので、10年位前の私だったら、それはこっちのせりふです。などといっていたかもしれない。でも、その時は、どういう言葉が愛のある言葉なんだろうと考えて出た言葉が、

あの時(全く勉強しなかった時)があって、今がある。

それ以来、この言葉が気に入って、この言葉も使うようになった。息子との大事な思い出の記念の言葉であり、私には宝物になった。あとで、その言葉が思わぬところで役に立つとは、その時想像もしていなかった。

以上の内容は、半年前には頭の中に大体合った内容だった。しかしそのあとすぐ、塾の講師の仕事がテスト対策や夏期講習で忙しくなり原稿書きは棚上げ状態だった。

代わりにと言っては何だが、私は、あるところで教えていただいた、感謝をすべてのもの、すべてのことに対して口に出す、感謝の行のようなものを始めた。今まで、使う言葉の威力は実感していたので、日々口に出す言葉として、追加することにした。すると、エネルギーが自分の中に入ってくるような気がして、積極的な気持ちになった。人付き合いの苦手な私が、日帰りの旅行に参加して、友達もできた。お盆休みには、家族で関東に旅行した。なにより、7月には一年ぶりに母に会って話もできた。感謝の言葉のおかげで、母のことは、楽しかったこと以外思い出さなくなっていて、お母さんありがとうと毎日心の中で言っていた矢先の出来事だったので、なにやらご褒美をもらえたような気がして、うれしくてたまらなかったのを思い出す。

いいことばかりが重なっているような気がしていたのだった。その時は。まさか9月になってすぐ、母が倒れて寝たきりになるとは想像もつかなかった。

[以上となります。よろしく願いいたします]